

「実存」と「行動」の人 北垣宗治教授のご退職を「お祝い」して

岩 山 太次郎

北垣宗治先生は「実存」の人である、「行動」の人である。学部学生時代を過ごされたアーモスト館で、先生のニックネームが「ジッゾン」であったことは、先生が英文学科の助手になられた1954年4月には、当時4年次生であった私もすでに知っていた。このニックネームほど北垣先生を的確に表現する言葉はほかにはない。それは、学者・教師としての人間「北垣宗治」の現実存在のあり方とかかかわっているものが、理性とか科学ではなく、人間としての「実存」そのものだからである。その「実存」がクリスチャンである先生にとってはイエス・キリストが信仰の対象であるのと同じように、学者・教師としての畏敬の念の対象にあるものと深くかかかわっている。それは新島襄であり、上野直藏であり、オーティス・ケーリである。これら3先生への「畏敬」は、私には恐ろしいものに思えたし、今でもそう思っている。同志社でのこれまでの北垣先生はこれら3人の先生とともにあった。

私は英文学科「いろは冗談カルタ」を作って一人楽しんだことがあったが、北垣先生のが「クリスチャン・ソルジャー^{きたがき}さん」であったのも、これら3先生への北垣先生の「畏敬」と「行動」が私にそう映ったからであった。

北垣先生の存在をはじめて知ったのは、私が学部3年の時だった。薄色のかなりダブダブのジャケットを着た、見なれない人が、かつての木造の徳照館2階の南側の教室の右前方の席に座っていた。「独書講読」のクラスで、テキストは『若きヴェルテルの悩み』で、担当の岩倉具実先生は、われわれ

学生と同じようにその人にも順番に当てられた。「ピッテ、ピッテ、ヘル・キタガキ」と、名前はシラブルを区切って呼んでおられたので、北垣先生の名前を知ったのである。その年は確か「ラテン語中級」の『アイネーイス』のクラスにも出ておられた。先生がまだ大学院の学生であった頃である。

北垣先生に親しくご指導をうけるようになったのは、先生がスコットランドとアメリカでの在外研究を終えて、帰学されてからである。やはり「実在」と「行動」の人であったことは変わらない。毎週水曜日、朝8時からの欽定英訳聖書の勉強会（私は「創世記」と「ヨブ記」のみで脱落したが）は一体何十年続かわからないはてしないものだった。上野直藏先生を編集長にお願いし、秋山健先生を中心に松山信直先生らとはじめた『ザ・イースト＝ウェスト・レビュー』誌では北垣先生は会計を担当され、1セントの狂いもない名会計であった（さすがは海軍経理学校である）——残念ながら、これは10号で資金が枯渇してしまった。これらにおいて、北垣先生は終始、「実存」と「行動」の人であった。毎週の聖書勉強会にしても、編集や会計の仕事にしても、普通ならば、相当の「努力」なしには続けられるものではないが、北垣先生の場合には、「努力」などという言葉はあたらぬ。それが先生の「実存」であり、そうすることが「実存」にかかわる「行動」なのである。

英文学科の先生方のなかで、北垣先生ほど研究室を「我家」のように愛され、利用された方はない。夕食を山下食堂ですまされ、毎日、夜遅くまで研究室におられた。外で酒宴があった夜でも必ず研究室へ戻られ、仕事をされた。それが新町尋真館4階の研究室であったし、今出川徳照館3階の研究室であった。「今日は疲れたから早く帰って休もう」などということは北垣先生の「実存」にはない。だからあの研究室からご著書『英文学史：1660—1798』（啓文社、1969年）が生れたし、文学博士の学位請求論文 *Principles and Problems of Translation in Seventeenth-Century England*（山口書店、1981年）という、わが国はもとより欧米にも類をみないご著書が生れた

のである。翻訳『新島襄の生涯』（ジェローム・ディーン・デイヴィス著、同志社校友会、1975年、後に小学館より刊行）も新島襄全集第10巻『新島襄の生涯と手紙』（同朋舎、1985年）もこれらの研究室から生れたのである。

北垣先生の学風は上記の二著書が如実に物語ってくれる。それは一言で言うと、精緻でしかも徹底した実証のうえにたった分析である。『英文学史：1660—1798』をみても、孫引きなどはひとつもない。原典にあたらぬことには何ひとつ書かれないのである。その上、毎学期の試験問題までついている徹底ぶりである。博士論文でも原典による実証主義はつらぬかれている。イギリス17世紀の翻訳論であるからギリシヤ語やラテン語との格闘の跡が鮮やかである。新島襄の資料や手紙の収集・調査もまさにこの実証主義にたってなされたものであった。「新島襄が1872年、岩倉具視一行の遣外使節団とヨーロッパへ渡ったのは、ヘンリー・ジェイムズとどうも同じ船であった」と、アメリカでの調査から帰国されたとき、熱っぽく話されたのを記憶している。資料の収集は大変な「努力」があってこそ実を結ぶものであろうが、北垣先生の場合はここでもそんな言葉はない。「実存」即「行動」であり、それが「実存」の「喜び」なのである。

私は北垣先生のクラスをとったことはない。「厳しい先生だけど、暖い先生だ」と、学生は口をそろえて言う。その通りだと思う。『怒りの葡萄』、『緋文字』、『インドへの道』などの研究会を同僚の先輩の先生方と一緒にさせていただいたとき、私も「厳しい暖かさ」を感じとっていたからである。

英文学科で3年連続して教務主任をされた先生は、後にも先きにも北垣先生しかない。学生は英文学科で4年間学ぶのであるから、教務主任も4年間しなければよいカリキュラムは作れないというのが、先生の「実存」と「行動」であった。結果は3年間しか続けられなかったが、随分改革された。研究室主任も就職委員もされた。評議員もされた。また大学全体の役職では、学生部長や法人の理事も歴任された。学生部長であられたとき、新町校舎か

ら今出川校舎まで、学友会のものに担がれて移動させられる「クリスチャン・ソルジャー」は「クリスチャン・マーター」のように見えた。その姿は今も険に浮ぶ。先生の「実存」は誠に「英文学科」と、「同志社大学」と、そして、はじめに書いた3人の先生とのかかわりにあった。

1989年2月18日、先生から同志社退職のご決心を伺った。そのときの驚きは今だに言葉では表わせない。先輩の先生方と一緒に、あるいは個人で、何度も翻意を懇願した。何度目かのとき、先生は「新潟は新島先生が伝道と教育を考えられたが、実現できなかつたところです。私はそれを実現させたい」と洩らされた。新潟での北垣先生の仕事は、先生の「実存」にかかわる「行動」であることがわかった。

去る11月29日、同志社創立記念日に、文部省の大学設置準備室に「敬和学園大学農地転用関係書類」とある大きな風呂敷包みを私は見た。先生の「実存」と「行動」が敬和学園大学の1991年4月の開校となったのである。北垣先生の新潟でのご活躍を祈念し、お祝いを申したい。

同志社大学は北垣先生の1954年より36年間（内、教授として23年間）におよぶ教育・研究上のご功績にたいし、名誉教授の称号を1990年4月1日付で贈った。

1990年12月1日